

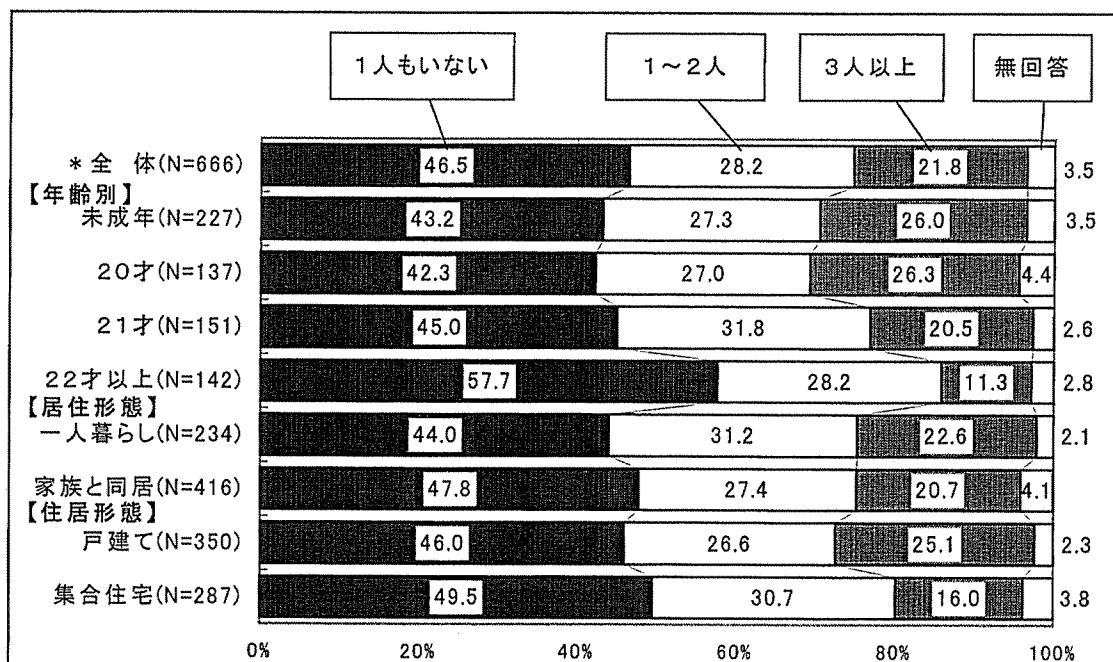
(3) 近隣関係

① 日常的な社交

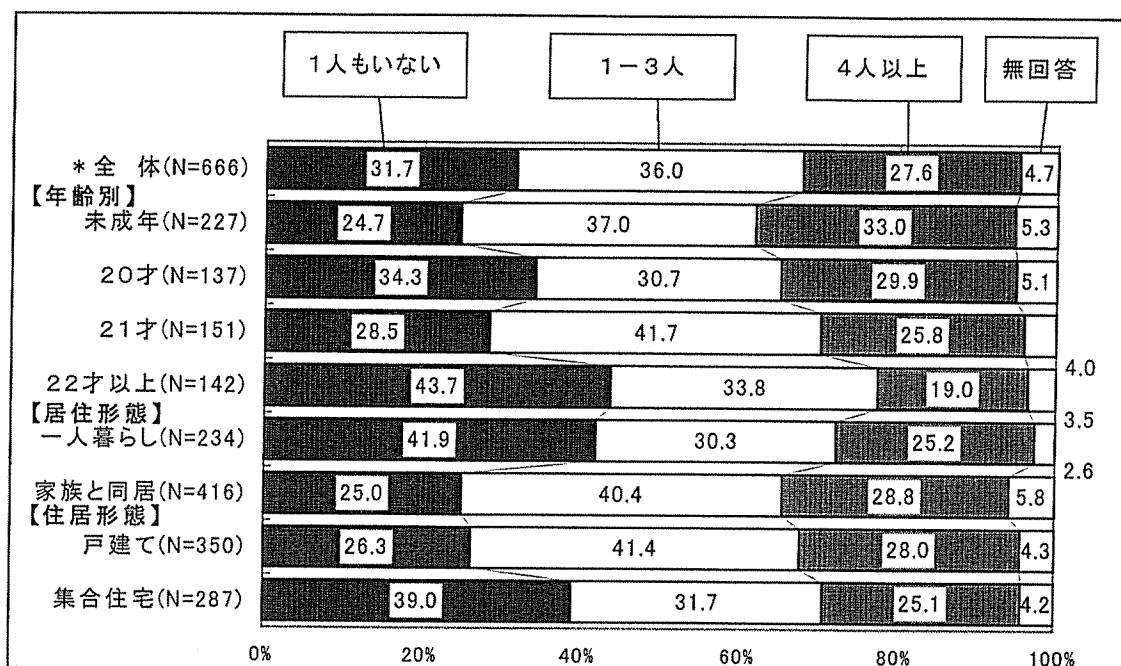
都会とくに大都会に住む者にとって、家庭や学校・職場に比べて地域社会は、現実的にも意識の面でも疎遠なものになりがちである。近所の人との交際の程度についてたずねた今回の調査結果をみると、“会えば挨拶する程度”の相手さえ「1人もいない」者はさすがに16.2%とわずかであるが、“ときどき話をする”相手となると3割強、“お互いの家を往き来する”間柄では半数に近い回答者が「1人もいない」と答えている。相手の平均人数も、それぞれ6.7人、3.7人、1.4人と低減している。

(図表 36) 近所で該当する方の人数

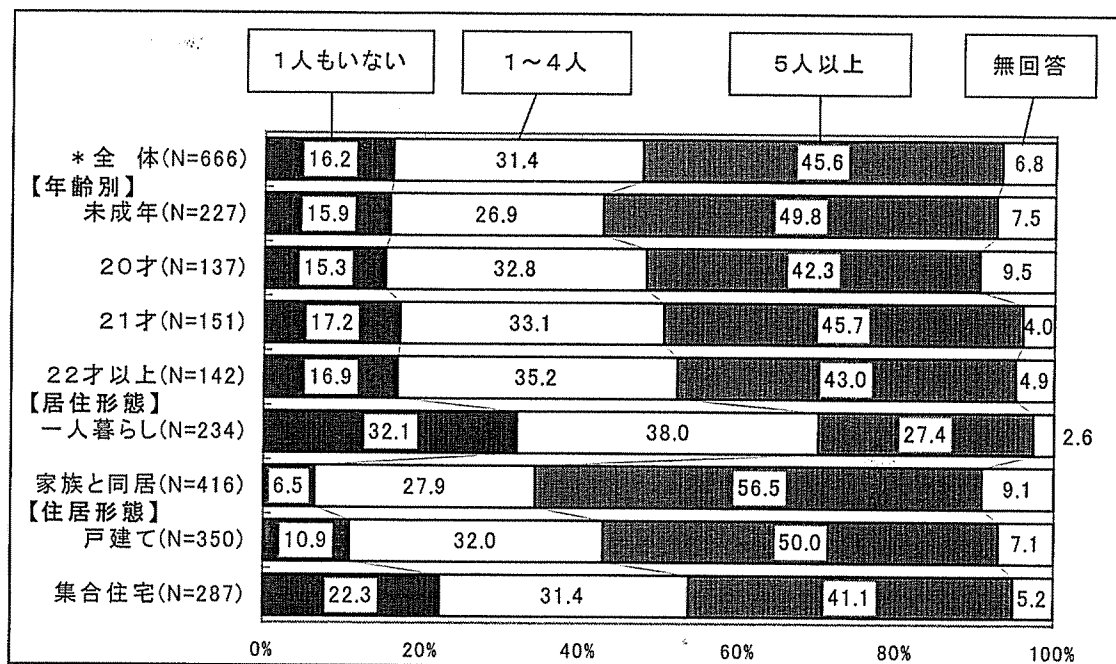
(1) お互いの家を往き来する人



(2) ときどき話をする人



(3) 会えば挨拶をする程度の人



地域社会へのとけこみの程度は、居住年数の長短や家族と一緒に暮らしているか一人住まいか、といったことによっても異なってくると考えられるが、今回の調査結果では、“会えば挨拶する程度の人”と“ときどき話をする人”に関しては「一人暮らし」の者、「集合住宅」居住者の方が、「家族と同居」生活の者、「戸建て」居住者に比べて、「1人もいない」という回答比率がそれぞれ高かったが、

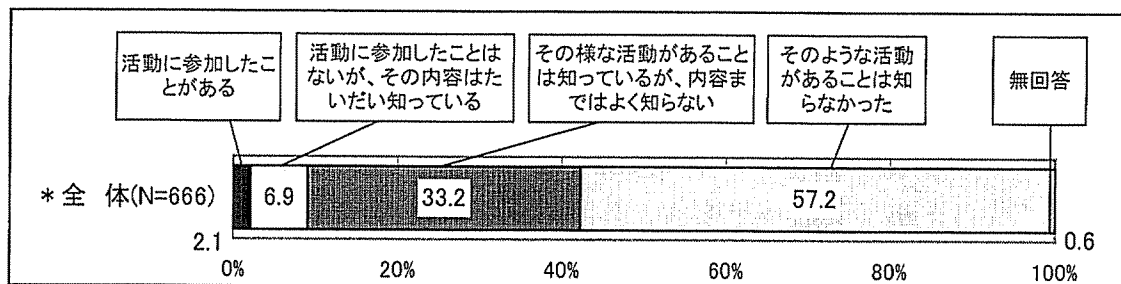
“お互いの家を往き来する”間柄に関しては特に違いはみられなかった。

ちょっと意外だったのは、年齢の高い者ほど近所づき合いが疎遠であるということである。年齢の高い者の方が“一人暮らし”や“集合住宅”に住むという傾向は見られないので、加齢と共に近隣との関係が薄くなっていく可能性が強い。この傾向が20歳前後の青年期に固有の現象であるのか、それともより一般的な傾向であるのかは、さらに検証が必要であろう。

② 住民活動の認識

近隣との日常的な社交に加えて、地域住民による組織活動に対する認知を、犯罪防止活動を事例としてたずねたところ、6割近い回答者がそうした活動の存在を「知らない」と答え、存在の事実を知っていてもその「内容までは知らない」と答えたものを含めると90%にのぼる。この結果だけから速断することは危険ではあるが、少なくとも意識の面で、大学生の生活空間から地域社会が大きく欠落していることは否定できない。

(図表 37) 地域住民による犯罪防止活動の認知

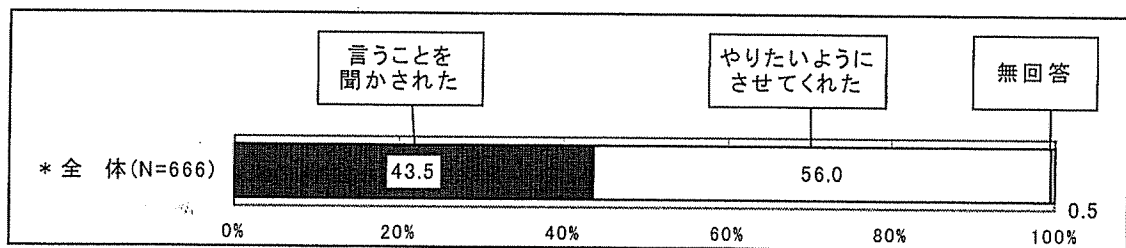


(4) 親との関係

人間の成長にとって両親との関係が決定的ともいえる重大な意味をもつことは、あらためて言及するまでもない。もとよりその内容は複雑で、軽々に論じられるものではないが、今回の調査では、両親との関係がメディア行動や犯罪非行などとどのような関連性があるかの一端を、検出しようと試みた。

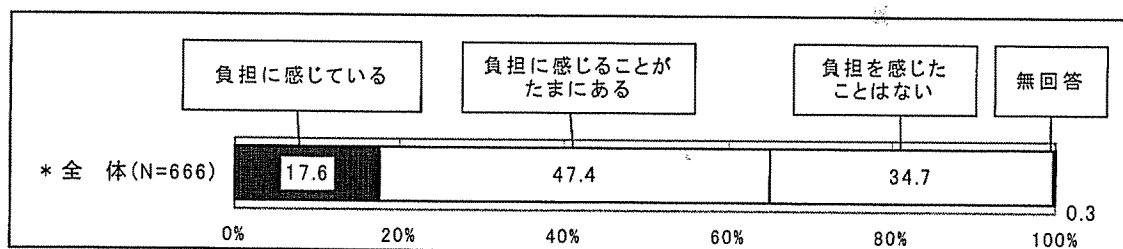
まず、親による強圧性の程度をたずねた質問であるが、親のいうことを「いつも無理矢理きかされた」という強制度の強いやり方から、「いつもやりたいようにさせてくれた」という自立性尊重（というか自由放任）的な規制の弱いやり方までの4段階で回答を求めている。結果は、両極への回答は少ないが、規制度の「強い体験」をもつ者と「弱い体験」をもつ者とが43.5%対56.0%に分かれた。

(図表 38) 子供の時、親が言うことを聞かせるために強制した程度



次に、親からの期待をどの程度負担に感じているかをたずねた質問に対しては、「いつも」および「よく」感じるという過重負担感をもった者は少なく、「たまに」感じる者が半数弱、負担を感じたことは「ない」と答えた者が3分の1という結果であった。

(図表 39) 親がもつ期待を負担に感じた程度



最後に、子ども時代親に叱られたときの気持ちをたずねた質問に対しては、「怖かった」「あたまにきた」「反省した」という回答がそれぞれ3割前後ずつであった。

(図表 40) 子供の時、親に叱られて受けた気持ち

